

ていたのである。あまりの恐しさに、某氏は一目散にかけて岩崎山の下に来たときであった。また一人の童が道路にたたずみ、某氏に話しかけたのである。

「お前さんは蒼い顔をして、あわてているようだが、何か恐しい怪しい物にでも出会ったのではないのか。」

某氏は「いや何物にもあわなかつた。」

と答えたところ、童子はやにわに自分の胸を開けて、「こんな物はみなかつたか」とみせたのである。見ると、さきほど池で見たような多数の目が妖しげに怨に燃えてにらみつけていたのである。あまりの恐ろしさに某氏は家にとんでかえり一心に神佛に祈りを捧げておりましたが、妖怪の残した言葉どおり、七月十五日病名不祥のままこの世を去つたのである。

その後、上木之崎の森田五右エ門という人が、俠気なこの人を憐み、末子五郎内狐が二度とこのようなことを繰り返かえさないようにとの祈願をこめて、八雲神社境内に小さな祠を建て稻荷神社を祀つた。その後、木之崎には化物は出なくなつた。

(話者 森田昌樹)